

『卒論』というのが多いが、自分はそういう学生の論文は見ないことにしている。なぜ卒業論文といえないのか。『卒論』とは文字どおり卒爾な論ということだ。そんな論文を読まされてはたまらない」と興奮の面もちで話された。その後、他の大学の先生にその話をしたら、「うちでは大学院の学生が『修論』の相談をしたいといってきたので、どなりつけたことがある」といわれた。

世の中万事簡便の昨今、「卒論」はいまや辞書にも「卒業論文の略」などと載る始末となったが、思えば私が卒業論文を書いたのも、二十年近い今は昔のことになってしまった。しかし、あの時の教授の激した口調は、今なお耳底に深く残っていて、人前で「卒論」と言うのに、いささか憚られるありさまである。

私は時おり卒業生に会うと、学生時代の思い出として最も印象深いものは卒業論文であったということを、しばしば聞かされる。そういう思い出をもつ卒業生は、例外なく「卒論」ならぬ卒業論文を書き残している。四年間の総決算として、その作業が苦しければ苦しいほど懐しい思い出となって蘇り、彼女の人生をより豊かなものにしたらしい。しかし、多くの学生にとって原稿用紙を五十枚以上書くということは、初めての辛い経験であることには間違いない。そこで例年、年の瀬が近づくころ、三年生に卒業論文に対する心がまえとその準備について話すことにしている。まず冬休みにじっくり考え、自分が最も情熱を注げるテーマを選び出すこと。新年に入ってそのテーマについて個々に話し合い、漸く決定の段階に至ると、今度は春休みを利用して研究文献目録を作り、研究史概観を試みて新学期に提出する。それをふまえて自身の論文の構想を具体的に導き出し、書きやすい部分からどんどん書いていく——とまあ、こん

なくあいに進めば、先の見通しは明かるい。先輩たちの論文はいつでも見られるように研究室に用意してある。それは将来、自分の論文もまた後輩たちの目にさらされることを意味する。何をテーマに選ぶかより、選んだテーマをどう扱うかに、今のところ指導の力点が置かれている。中古のゼミだからといって、すぐ源氏だ枕だと考える必要はない。今年は珍らしく「菅家後集」や「神皇正統記」が現われた。

冬休みは教師にとって憂うつな季節だ。せめてこのうっとうしい期間を、楽しく過せるような、ハツとする論文に出会いたい。

卒論を読んで — 中古

伊藤 嘉夫

夫子川上に立ちて曰く、逝くものは斯くの如し昼夜をやめず。などといつて、私は立ったまま毎年逝く川の水を見ている。この川、五月雨を集めて早し最上川のように、水量が増して、川幅が、堤をこえていくほどになったり、時に水流がやせて、川原はおおむね河洲になって、帯のようにほそい筋をひくといった年もある。私のいま言っているのは、私のゼミに来て、結局は私が卒業論文を読まねばならないことになる学生の数は、水量の増減が目立つことを言ったのだ。

第一回の卒業生の論文は三十二人位読んだ。この回の論文は作家研究が多かった。印象に残ったのは大石正子君の「伊勢集の研究」だった。彼女は三年の夏休みに広島大図書館で古写本を写して校本

を作ったり、伊勢集の語彙総索引を作ったりした大冊だった。「有島武郎」をやった田代君の印象に残った。第二回は、高梨桂子君たち二十何人かだった。ここでは、木崎尚君の「源氏物語における紙と書」という論文はよかった。第三回は豊田澄子君など七人。ここでは人数が少なかったもので、しょっちゅう旅行をした。歌を作ったり、文学論をやったりした。豊田澄子君の「業平」木上真知子君の「千里」は印象にのこる。豊田君の美のまとめ、木上君の比較文学的研究は力作だった。四回の佐藤順子君たちは十四人だ。これは何となくとぼけた組であったが、仲よい仲間だった。稲葉優子君の「源氏物語の音楽」は力作だった。資料が忠実にあつかわれていた。木崎君と同じように資料のたんねんなあつかいがよかった。大島真知子君の「詞花集の表現工学的研究」は音調表現にとらえられた詞花集の前代と集以後の推移をあつかった、丹念な作業だった。「永福門院研究」は、西山公子、小田倉裕子君二人が別々に出した。西山君は自分の筆を縦横にふるった。小田倉裕子君はおとなしく無難にまとめた。

今年 は七人、来年は六人、ことによると一六人になる。遠くなり近くなるみの浜千鳥ふえたりへったりするものたのしみといえはたのしみでもある。

私のみた卒業論文

——中世

田尻 嘉信

ことしもあと十日ばかりで卒業論文のメ切期限がやってくる。こ

の時期になるとさすがに学生の方も気が気ではないらしい。

この数年、いわゆるゼミで「新古今和歌集演習」を受けもって、私も卒業論文をいくつかみてきた。六、七十枚から中には二百枚に近い大冊もあった。それでも近代文学などに較べると、数はぐっとすくないようである。平安末期から中世にかけてが対象になるが、ほとんどが新古今の時代を書いている。

聞いてみると、毎年のことながら何を題目に選ぶか、それが一番の悩みのようにみうけられる。この段階の和歌は、日常生活との直接的な関連を断ち詩的世界を意識的に作り出そうとしたものである。それを「王朝の美学」などというとかわかったような気がしても、やはり実際にはいまの生活や意識との接点になるようなものがない。さて何を書いたらいいのかというときどきとなるのである。式子内親王・俊成女・宮内卿といった「女流」の歌人を対象にした論文がめいたつのは、それなりに納得するところがあるからである。世の女流研究者が対象を選ぶ場合にはたらく共通の心理といえるかもしれない。ほかには西行・俊成・後鳥羽院・定家・家隆といった歌人が対象となっている。

資料的にも恵まれ、参考文献も多い著名歌人への関心が深いのは当然であろう。しかし多くの場合、歌人・歌風の解明が公式的な概観の程度に終わっているのは惜しいことであった。その点では、歌語を丹念に調査して隠岐配流を契機とする院歌風の変貌を明らかにしたり、出詠歌会の勝負や判詞から女流歌人の中における俊成女の評価を探ったり、屏風歌から歌の色彩感を求めたりしたゆへに苦勞がにじんでいるようにみえた。

撰集の基礎となった五十首歌・百首歌や歌合・歌論書などに交替